日本フランス語学会ニューズレター第22号 (2014年) 掲載
「企画・運営担当より」 (酒井 智宏)

運営･企画担当より

恥の多い生涯を送ってきた人間にとって、過去とは消去の対象でしかありません。消去の努力を怠ると、人間失格の烙印を自らに押すことになります。しかし、今日だけは、人間失格にならない範囲で、昔のことを思い出す努力をしてみたいと思います。

世紀が変わってまもない 2001 年 4 月 28 日(土)、私は早稲田大学を訪れました。生涯で二度目の早稲田訪問でした。一度目は、まもなく世紀が変わろうとする 1999 年の 2 月のことで、当時、週に 2 時間だけフランス語を教えていた予備校の企画で、バブル期さながらの入試応援に駆けつけたのでした。私が担当していた受験生はあえなく不合格となり、以後、その受験生は二度と口をきいてくれなくなりました。教師失格の烙印が押された瞬間でした。その 10 ヶ月後、私は予備校から戦力外通告を受けました。

それ以来避け続けていた早稲田大学を二度目に訪れたのは、日本フランス語学会の例会で発表するためでした。私にとって、学会発表は四度目、例会発表ははじめてのことでした。はじめてのことなのに私はなぜか自信満々で、企画・運営担当だった青木三郎先生 (筑波大学) に数々の自分勝手な要求をしました。見事に天罰が下って発表はさんざんな結果に終わり、その発表をもとにして投稿した論文もほとんど相手にされることなく不採録となりました。研究者失格の烙印が押された瞬間でした。その例会のもう一人の発表者は、入試応援にともにかけつけた予備校時代の同僚でしたが、その同僚が我よりはるかに偉く見えました。これを機に私の研究は大スランプに陥り、私生活の絶不調にも見舞われ、2003 年 9 月までの二年半、学会発表の舞台に立つことができませんでした。

これは実は私の記憶違いで、当時の記録をいま調べてみると、世紀末の 2000 年に何度か、例会参加のために早稲田大学に足を運んでいることが分かりました。2001 年 4 月 28 日(土)は、私にとって二度目の早稲田訪問ではなかったのです。私の脳が入試応援と例会発表の記憶を消去しようと奮闘するあまり、デカルトの悪霊が私の記憶を改竄し、かえってその二つの記憶だけをうっすらと残してしまったのでしょう。それと、入試応援は本部キャンパス、例会発表は戸山キャンパスだったようですが、それもよく覚えていません。

あれから 13 年経った 2014 年 4 月、早稲田から精神的にもっとも遠いところにいる私がなぜか早稲田の専任教員となり、例会会場を早稲田に戻すことにしました。私自身が大失敗を喫した場所で、みなさんとともに再出発をはかれることに大きな喜びを感じています。

特に若い会員のみなさんにお伝えしたいのは、例会発表の失敗くらい、いくらでも取り戻せるということです。私は、2001 年 4 月の失敗の後、29 回も学会で発表し、例会運営担当という立場でついに早稲田に戻ってくることができました。たとえ発表で失敗しても、しばらく落ち込んでいるあいだに、不都合な記憶はデカルトの悪霊が改竄してくれるかもしれません。それからまた研究をはじめればよいのです。実年齢がいくつであれ、それができるうちは、若いと言えるでしょう。

フランス語学とはまったく異なる分野の話ですが、つい最近、東京の有名私大の専任教員という誰もがうらやむ地位にありながら、「校務が忙しい」という奴隷的口実と、「外国に行きたくない」「新しいことに挑戦したくない」という老人的発想から、周囲の懸命な説得に耳を傾けようともせず、国際学会からの招待講演の依頼を断る「研究者」を見ました。引退間近の高齢者ならともかく、この「研究者」は専任教員歴が私と同じ年数しかありません。ほんとうに糾弾されるべき恥は、このように、失敗を恐れて新たな挑戦をやめ、学問の発展の可能性を断ち切ってしまうことです。私としては、これを反面教師とし、一つ一つの小さな研究発表が学問の発展を支えていることを肝に銘じて、引き続きみなさんの発表をサポートしていきたいと思います。

若い会員のみなさんの、若い挑戦を早稲田大学でお待ちしています。

(酒井 智宏)